

2020年 12月
第11回留学報告書
久門 智祐

2015年の夏より、University of PennsylvaniaのPhD課程(生物学)に在籍する久門智祐です。6年目夏から、6年目冬の現在に至るまでの経過を報告します。さて、以前は12月卒業を予定していたのですが、卒業予定を次の夏に少々ずらしました。以前は早く論文が出版される雑誌に出して、早めに卒業しようかと思っていたのですが、多少卒業が遅れても大きい雑誌から出せた方が良いとのアドバイスを様々な方面からいただいたので、Cellという雑誌に投稿することにしました。NatureやScienceは論文の文字制限がかなりきつくと、その倍以上書けるCellから出すことにしました。大きな雑誌は選考のプロセスが長いから覚悟しておいた方が良いでしょうと言われていましたが、1週間で決まると言われた編集部の選考に5週間かかり、なんとか編集部の選考に通った現在は、長い長い査読の真っ只中です。査読にまわるのが出来たので、原稿をbioRxivへ投稿することができました。

<https://www.biorxiv.org/content/10.1101/2020.11.26.400515v1>

これで一応卒業前の最終試験であるディフェンスの予定は立てられるのですが、近いうちにポスドク先も決めるので、それがどのようになるか、ある程度見当をつけてから卒業日程を決めていこうと思います。ポスドクも引き続きアメリカでやる予定で、現在は複数のラボと話をしているところです。マウスを使用した実験は非常に時間がかかるうえ大変なので、ポスドクではハエやカエルなどを使用した実験系を考えています。そのほか今は、論文の査読で指摘されそうな実験をしたり、学位論文の一部になる予定の総説の執筆をしたりして、長かったPhD課程もようやく終わりが近づいてきました。

今年は学会が全てオンラインになり、ASCB/EMBO (アメリカとヨーロッパの合同分子生物学会)、CSHL Germ Cells (アメリカの専門学会のひとつ)、そして日本の分子生物学会へ参加しました。オンライン学会は、現地で参加する本来の形式と違って、参加者全員がそれぞれの作業の片手間に参加するためコミットメントがマイチなうえ、口頭発表してもどんな反応なのかわかりにくく、ポスター発表も学会ごとに形式が違って、やはり直接会ってやりとりをする対面の学会が一番だと思いました。アメリカではワクチン接種が行き届く前に全員に感染するのではないかと思うほど感染が拡大していますが、いつか対面の学会が再開する日が来ることを願っています。

さて、卒業後は引き続きアメリカでポスドクをする予定ですが、同時に東京で起業もする予定です。会社の登記自体は書類の不備さえなければ今月中にも完了する予定です。バイオベンチャー企業で、ゲノム解析やそれぞれのゲノムに合わせたパーソナライズ、長期的には人工染色体の実用化などの事業を予定しています。会社の方は研究の空き時間などを利用して、並行してできる程度からまずは始めようと考えています。ペンシルベニア大学のMBAで留学する人の中には起業に興味のある人も多く、そのような人のおかげで準備を進めることができました。起業は以前からひそかに夢みていたので、実際に動き出して嬉しいです。

論文の査読への対応や、ポスドク応募など卒業に向けた準備、会社の運営などやる事が増え、忙しくなってきましたが、体調を崩さない程度に、適度に気分転換なども挟みつつ、ひとつひとつの作業をこなしていこうと思います。